スペース・ミュージックの世界

髙野敦志

はしがき
冨田勲の《宇宙幻想》
HARUの《銀河宇宙オデッセイ》
ジョン・セリーの《処女航海》
マックス・コルバッチョの《宇宙の旅人》
マックス・コルバッチョの《アルス・ルーキス》
マックス・コルバッチョの《ブレス・ストリーム》
太陽系の奏でる音楽

目次

はしがき
冨田勲の《宇宙幻想》
HARUの《銀河宇宙オデッセイ》
ジョン・セリーの《処女航海》
マックス・コルバッチョの《宇宙の旅人》
マックス・コルバッチョの《アルス・ルーキス》
マックス・コルバッチョの《ブレス・ストリーム》
太陽系の奏でる音楽

はしがき

スペース・ミュージックというと、ニューエイジ・ミュージックや静かで催眠性のある音楽のことをいうらしい。ここではより広くとらえて、宇宙のイメージを喚起する音楽全体と考えることにする。とはいっても、僕自身が知っている範囲で、いくつかのアルバムを紹介するに過ぎないわけだが。

冨田勲とみたいさおのシンセサイザーによる《宇宙幻想》、ＮＨＫ特集『銀河宇宙オデッセイ』のサウンドトラック、意識変容の信号へミシンクを組み込んだアルバム、スペインの若手音楽家マックス・コルバッチョのアルバム、ホルストの《惑星》とNASAの宇宙探査機がもらした惑星の音など、雑多な内容ではあるが、僕にとっては宇宙をイメージさせる音楽として、かけがえのないアルバムばかりである。

もし興味を持っていただけたなら、ご自身で実際にお聴きになり、音によって表現された宇宙を、ぜひ体感なさってください。

二〇一八年十二月二日

髙野敦志

冨田勲の《宇宙幻想》

シンセサイザーによる演奏が、全く新しい音楽の到来を予感させた。コンピューターの出す音は、アナログの楽器を模したはずだが、それが全くかけ離れていたところに、未来社会の到来を空想させてくれた。未来に対する夢を抱けた幸福な時代の音楽である。

冨田勲はシンセサイザー音楽の第一人者で、それを使った処女作《月の光》Clair de luneはドビュッシーDebussyのピアノ曲を、シンセサイザーで演奏したもので、ジャンルによる分類が不能ということで、日本のレコード会社からは取り扱いを拒否されたが、欧米では早くから価値が認められた。シンセサイザーを使った冨田の演奏は、ドビュッシーの《火の鳥》L'Oiseau de feuやホルストHolst の《惑星》The Planetsも聴いたが、冨田の意匠で構成されたアルバムの中で、スペース・ミュージックの傑作としては、《宇宙幻想》Kosmosを挙げるべきである。僕は大学生の頃、ＬＰでこのアルバムを購入したが、中年になってからＣＤで聴き直しても、面白さは変わることがなかった。

１曲目の「スペース・ファンタジー」Space Fantasyは、リヒャルト・シュトラウスRichard Straussの《ツァラトゥストラはかく語りき》Also sprach Zarathustraと、ワグナーWagnerの《ワルキューレ》Die Walküreの騎行、《タンホイザー》Tannhäuserの序曲をミックスした作品。ゾロアスター教の預言者、ツァラトゥストラZarathustraの登場を表す荘重な出だしと、ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指環』Der Ring des Nibelungenの神話的世界が、時空を超えた夢のように、渾然こんぜん一体とした音の世界を形作っている。

２曲目はオネゲルHoneggerの《パシフィック231》Pacific 231。これは蒸気機関車の車軸配置を表すという。発車を表すベルの音、周囲に鳴り響く汽笛、機関車はゆっくりと動き出し、速度を上げていくさまがリアルに表現されている。途中で通過する警報器の音が、ドップラー効果を響かせているところに感動したものである。

３曲目の《答えのない質問》The Unanswered Questionは、アイヴス Ivesの室内アンサンブル。歪んだ空間の中に、すうっと吸い込まれていく感じで、宇宙に潜む危険な罠わなを暗示しているかの印象である。

４曲目はジョン・ウィリアムズJohn Williamsの《スター・ウォーズ》Star Warsのテーマ。軽快な電子音と口笛らしい音で始まり、シンセサイザーの電子音を最大限に活かして、原曲をアレンジしている。作曲家をからかっていると思われるほど、いたずら心があふれた作品である。

５曲目はロドリーゴRodrigoの《アランフェス》Aranjuez。悲壮な美しさをたたえたギター曲を、シンセサイザーによって翻訳した作品。テーマは同じでも、地上とははるか彼方の異世界ほどに表現の仕方が異なる。

６曲目はグリーグGriegの《ソルヴェーグの歌》Solveigs sang。これはグリーグの組曲《ペール・ギュント》Peer Gyntの第２組曲をアレンジしたもの。悲痛な短調の響きは、主人公ペール・ギュントを待ち続けた村の娘。ソルヴェーグの思いを表している。ここでも、冨田は茶化すように、曲の最後の音程を狂わしている。

７曲目はディニクDinicuの《ホラ・スタッカート》Hora staccato。前の曲とは一転して軽妙で愉快な曲。スタッカートとは音楽用語で、一音符ずつ短く切ることを意味し、はね回る音符の踊りを見ているようである。

８曲目は「ソラリスの海」The Sea Named "Solaris"。スタニスワフ・レムStanisław LemのＳＦ『ソラリス』Solarisを、ソ連時代の映画監督タルコフスキーTarkovskyが映画化した。『惑星ソラリス』に冨田は触発されたという。映画でもバッハBachの《我汝に呼ばわる、主イエス・キリストよ》Ich ruf dir,Herr Jesu Christが用いられている。

妻を自殺させてしまった主人公クリス・ケルヴィンは、宇宙船の中で亡き妻の幻覚に襲われる。罪悪感に苛さいなまれたケルヴィンの姿を見て、原作者のレムはドストエフスキイDostoevskyの世界だと不満を洩らした。たしかにバッハの曲を背景に流すことで、タル

コフスキーの映画は、ＳＦ仕立ての宗教劇の様相を帯びていた。
　この作品のテーマである惑星ソラリスは、星自体が生命体であるらしく、接近する者の意識を幻覚にいざなう。古代インド人は、宇宙を「マーヤ」（幻）と考えたが、ソラリスはそれを体現したような惑星である。《宇宙幻想》というアルバムの終結にふさわしい作品である。
　なお、海外版の《宇宙幻想》では、４曲目の《スター・ウォーズ》のテーマが第１曲目となっている。映画『スター・ウォーズ』の人気にあやかるためだろうが、国内盤の順序の方が、冨田勲の構想に忠実だと思われる。

HARUの《銀河宇宙オデッセイ》

一九九〇年にＮＨＫで放送された『銀河宇宙オデッセイ』A Galactic　Odysseyは、宇宙旅行仕立てのドキュメンタリーで、少年時代の宇宙への夢を擬似的に実現させてくれた。オデッセイというタイトルは、ホメロスHómērosの叙事詩『オデュッセイア』Odysseiaに由来する。ジャズ・ギタリストHARUが作曲したテーマ曲を聴くと、番組を見た時の各場面がよみがえってくる。演奏にはソプラノ・サックス奏者のウェイン・ショーターWayne　Shorterも参加している。ジョージ・オタキ氏のライナーノートによれば、HARUはウェイン・ショーターに「宇宙のM78星雲から来た宇宙人ですが、一万年以上前、前世の前世で友達だったので、是非再会したい」と手紙に書き、会いに来たショーターは「一万年ぶりだな」と言ってくれたという。ちなみに、HARUの本名は高内春彦で、女優松坂慶子の夫である。

１曲目の「オデッセイ～序曲」Odyssey　Overtureは、番組の冒頭で流された曲であり、僕自身が若かった頃の宇宙への憧れがよみがえってくる。２曲目の「イオ」Io(New　Age　Groove) は木星の惑星イオをテーマとした曲。宇宙に向かって噴火を続ける星が、地球以外にあったという点で、観測当時は大きな衝撃を与えた。個性的な衛星をたたえるように「イオ、イオ」という呼びかけの声が、電子音楽にミックスされている。

３曲目の「フォッシル・コスミック」Fossil　Cosmosは宇宙の化石という意味。宇宙空間に漂う星の残骸をイメージしているのか。ギターの華やかな演奏と、軽快で心弾むメロディーが印象的である。４曲目は「タイム・パラドックス」Time　Paradox。時間の逆説とは、速度を上げて移動すると、時間の流れが遅くなる相対性理論をイメージしているのか。謎をかけるような、迷路に誘い込むような印象である。５曲目の「エピソード・オデッセイ」Odyssey Episodeは、ひとときの休息を促すような、一日の終わりを告げるようなメロディー。

６曲目の「ルナ」Lunarはラテン語で月を意味する。子供たちの歌声に始まり、月を見て宇宙に思いを馳はせた幼い頃を思い起こさせる、ちょっと感傷的な音楽。７曲目の「タキオン」Takionは、光速を超えて移動すると仮定されている粒子のこと。重低音の鈍い響きが、ミステリアスな空間のねじれへといざなう。もし光速を超えて移動できたら、時間が逆行してしまうが、未来から過去を改変できないというパラドックスにぶつかる。特殊相対性理論では、その存在は否定されていないというが。

８曲目の「ネビュラ」Nebulaは星雲のこと。宇宙空間に漂うガスであり、そこから新たな恒星が誕生する。あらゆる可能性を秘めながら、まだ始まっていない状態。期待だけが膨らんでも、人類の宇宙への旅は実際には始まっていない。９曲目はふたたび「オデッセイ～テーマ」Odyssey　Theme。１曲目のメロディーを変奏して、ゆったりとしたテンポで幕を閉じる。

ジョン・セリーの《処女航海》

ヘミシンクというのは、バイノーラル・ビートという技術を用いて、左右から異なった周波数の音を流し、脳波をアルファ波やシータ波に誘導する技術である。右脳と左脳の働きが全開し、意識の拡張や神秘体験ができるという。その信号を音楽に埋め込んだものはメタミュージックと呼ばれている。リラックスしたアルファ波や、夢見心地のシータ波で聴く音楽は、他では味わえないくつろぎを与えてくれる。

今回紹介する《処女航海》Maiden Voyageは、スペース・ミュージックの第一人者であるジョン・セリー Jonn Serrieのアルバム《サンデー・モーニング・ピース》Sunday Morning Peaceに、ヘミシンクの信号を埋め込んだアルバム。途切れることなく続く電子音楽に、航海を感じさせる波音などがミックスされている。《処女航海》は作曲者はジョン・セリーであるが、アルバムのアーティストはMonroe Products となっている。発売元は体外離脱の研究者、ロバート・モンローRobert Monroeが設立した研究所である。

アルバムのカバーに描かれているのは、おだやかに凪いだ海を行く帆船。水面は光を浴びて輝き、甲板には潮風が吹き渡る。これは自分自身の内面への旅でもある。冒頭に置かれた「サンデー・モーニング・ピース」Sunday Morning Peaceも、続く「処女航海」Maiden Voyageも順風満帆の船出を表現している。

実は、これは人間の魂の内部に広がる宇宙であって、海は無意識の象徴なのだろう。３曲目のThe Enlightened Pathは「賢明な道」と訳せるが、文字通りは光に照らされた道、あなた自身が進むべき針路である。メロディーも内宇宙へいざなうかのように、潮騒に星屑ほしくずをイメージした音が交わる。

４曲目のBreath of The Valleyは「谷間の呼吸」とでも訳したらいいのだろうか。銀河を航海する帆船に当たる宇宙の息遣いを、表現しているのだろうか。潮騒に小鳥たちのさえずりがミックスされている。

　最後の曲はSes　Mist「海霧」である。船は意識と無意識の間あわいを突き進み、恍惚とした安らぎの境地へと至る。

マックス・コルバッチョの《宇宙の旅人》

僕の宇宙好きは、小学一年生の時、渋谷にあった五島プラネタリウムにつれて行ってもらい、日下実男くさかじつおの『わたしたちの太陽系』という本を買ってもらってからだろうか。

大学を卒業した頃、NASAの宇宙探査機ボイジャーなどがとらえた振動を、可聴音に変換したものが売り出されていた。「地球の声」 Voice of Earthや「衛星イオ」Sphere of Io、「海王星」Neptuneだけは買ったのだが、カセットテープやＣＤで一つ二千円程度したから、それ以上買いそろえることはできなかった。

その中で気に入っているのは、やはり「地球の声」である。人間が発している電波が影響しているんだろうけど、地球って星は随分おしゃべりなんだと感心したものである。部屋を真っ暗にして、オーディオだけにスイッチが入っていると、それが操縦席の機器のように見えて、自分の部屋が宇宙船になったような気がしたものだ。

一九九〇年にＮＨＫが放送した《銀河宇宙オデッセイ》A Galactic Odysseyは、宇宙旅行仕立てのドキュメンタリーで、幼い頃の僕の夢を擬似的に実現させてくれた。HARUが作曲したテーマ曲のＣＤを聴くと、番組を見た時の一場面がよみがえってきたものだ。

初めてパソコンを買った頃、SYNFORESTという会社が《地球》というソフトウェアを発売していた。人工衛星から撮影された写真と、アンビエント系の音楽、宇宙飛行士の言葉が組み合わされていて、宇宙で人類が何を夢見ているのか考えさせられたものだ。愛用してきたソフトだけれども、WindowsXPまでしか動かなかった。

そのほか、ナショナル・ジオグラフィックNational Geographicが制作した《宇宙の果て　スペース・トラベラー》が、多数のＣＧを使用して宇宙の神秘的な美しさを伝えていた。これはインターネットで見ることができる。

今回紹介するのは、マックス・コルバッチョ Max Corbachoの神秘的な音楽に、ヘミシンクの信号を重ね合わせたアルバム。イヤホンで聴くだけで、宇宙飛行士になって旅するような気分にさせてくれる。《宇宙の旅人》Cosmic Travelerも、アルバムのアーティストはMonroe Products となっている。

いずれこの地球が居住不能になったとき、人類は新たな天地を求めて旅立たなければならない。仮にその時代まで人類が生存していたとして、宇宙に旅立ったとしたら、どんな思いを抱くことだろう。母なる地球は永遠に失われてしまい、宇宙を果てしなくさまよう人間は、地球での出来事を夢のように想像するだろう。

これは人類が生存し続けるための希望であるとともに、死後の世界を象徴してはいないだろうか。観音かんのんの浄土へ旅立つ「補陀落渡海ふだらくとかい」が、現実には小舟に僧侶を閉じ込めて、あの世に送り出す旅であったように、故郷を失った人類にとって、宇宙旅行とは地上に立つことができぬまま、船体の中で死に絶えるしかない運命を、背負いながらの果てしない旅なのではないだろうか。

マックス・コルバッチョの《アルス・ルーキス》

スペインのミュージシャン Max Corbachoの《宇宙の旅人》Cosmic Travelerに感動して、《アルス・ルーキス》Ars Lucisというアルバムをダウンロードしてみた。ラテン語で「光の芸術」を意味する。アルバムの写真にあるように、青いステンドグラスをはめられた大聖堂がイメージされる。崇高な神の世界を感じさせるために建てられたと言われても、キリスト教徒ではない僕にはピンと来なかったのだが。

ユイスマンスHuysmansの『さかしま』À rebours におけるデカダンスや、『彼方』Là-basにおける悪魔崇拝に興味を持った僕も、『大伽藍』La Cathédrale はよく分からなかった。マックス・コルバッチョの《アルス・ルーキス》は、カトリックの大聖堂が放つ神秘を、感性的に理解させてくれる。ステンドグラスの青は星空を象徴し、神に対する崇拝の念は広大な宇宙に対する思いに通じるのだと。

マックス・コルバッチョの音楽は、シンセサイザーを駆使した奇蹟のような音である。聴いているだけで意識の広がりを感じる。《宇宙の旅人》以上に感動させられた。音で光を表現しているので、聴覚と視覚がシンクロして、暗闇に大聖堂の幻影が浮かび上がってくるようだ。これにヘミシンクの信号が埋め込まれたら、神秘の内側に入って行けそうな気がする。

さて、最初、僕は《アルス・ルーキス》をmp3でダウンロードしたのだが、音楽そのものには感動したものの、何か物足りない。重低音が体全体に響いてくる感じがないのだ。マックス・コルバッチョのように、精神に訴えかけるアーティストの作品は、圧縮された音源では魂を震わせないのだ。そこで、Apple Losslessの音源を入手して聴いてみると、やはり深みが全然違う。

マックス・コルバッチョのＣＤは売り切れのものが多い。どうやら、ダウンロード販売に切り換えていくらしい。bandcampというサイトで、音源をダウンロード販売しているのを知った。音源は

mp3以外にも、Apple Lossless、flac、wavなど各種選択できる。

マックス・コルバッチョの《ブレス・ストリーム》

スペインのアンビエント・ミュージックの作曲家、マックス・コルバッチョMax　Corbachoを知ったのは数年前だが、その精神性にすっかり魅せられてしまった。最初に聴いたのは、ヘミシンクの信号が埋め込まれた《宇宙の旅人》Cosmic Travelerである。
「まるで自身が宇宙船に乗り込み、宇宙の旅人になったように感じた」と、英語でメールすると、コルバッチョ氏自身が「あなたのようなメッセージをもらうことが、自分自身の仕事に対する最高の報いです」と英語で答えてくれた。
「ヘミシンクのバージョンで、《アルス・ルーキス》Ars　Lucisなどのアルバムも聴いてみたい」という希望に対しても、氏は今後のアルバムで考えたいという旨むねを伝えてくれた。僕は感激してしまって、しばらく興奮していた。天才的な音楽家とコミュニケーションできたという歓びである。

《アルス・ルーキス》は《宇宙の旅人》を超える傑作だと感じた。光を音で表現し、空間性まで擬似的に再現しているのには驚いた。「共感覚」という言葉があるが、マックス・コルバッチョの音楽は、音で視覚を刺激し、ヴィジョンを喚起する力を持っているのである。これにヘミシンクの信号が埋め込まれたら、その世界に行ってしまいそうである。

さて、今回紹介するのは《ブレス・ストリーム》BreathStreamというアルバムである。「呼吸の流れ」という意味で、宇宙が生命を持って息しているさまを、音楽化したのだろうか。《宇宙の旅人》が宇宙を旅する人間を表現したものであるのに対し、このアルバムでは宇宙そのものが表現されている。宇宙が展開し発展した末に、人類のような知性的な精神を持つ生物が誕生したわけだが、生命という観点から見ると、宇宙そのものも魂を持ち、眠ったまま、夢見ているといった感じである。インド哲学で言えば、宇宙の「純粋精

神」を表現したものといった感じである。

　人間は自身の一生が終われば、永遠の眠りが待っているのだろうが、次の生を受けて誕生するまでの間は、宇宙そのものと一つになって、眠ったまま夢を見ている。そんな希望を感じさせてくれるアルバムである。

太陽系の奏でる音楽

先日、本屋で占星術の本を覗いたら、運命を司つかさどる星として、いまだ冥王星も健在だった。一九三〇年にアメリカ人に発見されたこの星は、海王星の外を回る九番目の惑星とされてきたが、二〇〇六年冥王星よりも大きなエリスと同じ「矮惑星わいわくせい」に格下げされた。英語名の"pluto"が「格下げする」という意味の動詞として使われ話題を呼んだ。

格下げされてしまったといっても、太陽系から冥王星がなくなってしまったわけではない。占星術から冥王星が除かれるいわれはないのである。そもそも、占星術自体が疑似科学であって、それを信じた人間に限って、告げられた運命に従った生き方をしているに過ぎないのかも。

太陽系の惑星をテーマに、イギリスの作曲家ホルストHolstが管弦楽組曲《惑星》The Planetsを作曲した。初演は一九二〇年のことである。当時は冥王星は発見されておらず、作曲されたのも海王星までの七曲である。

ホルストの《惑星》は、「火星、戦争をもたらす者」Mars, the Bringer of Warから始まる。軍神マルスMarsを表す「火星」は、高らかに鳴る軍靴の響きから始まる。これは近づきつつある第一次世界大戦を予感して、作曲されたものと思われる。

「金星、平和をもたらす者」Venus, the Bringer of Peaceは、美の神ヴィーナスを象徴する。全曲中もっとも甘美な響きを持ち、うっとり聞き惚れる方も多いことだろう。実際の金星は、大きさこそ地球の兄弟星と言えるが、鉛も溶ける灼熱しゃくねつの世界、深海のような気圧で視界はゆがみ、薄暗い中を火山のマグマが流れ、砂嵐が吹きすさび、絶え間なく雷鳴がとどろく。美の神が住まうどころか、まさしく地獄の世界である。

「水星、翼のある使者」Mercury, the Winged Messengerは、ローマ神話ではマーキュリー、ギリシャ神話ではヘルメスを表す。主に精

神的能力を司り、熟練と敏捷びんしょうな性格を授ける神である。金属では水銀を象徴する。トリックスターのように、目まぐるしい動きで立ち回る。天体としての水星は、自転速度が公転速度の三分の二と遅く、灼熱の世界とすべてが凍りつく寒冷な世界が、同じ星の中に共存する、いとも奇妙な星なのである。

「木星、快楽をもたらす者」Jupiter, the Bringer of Jollityは、《惑星》の中でもっとも愛されている曲である。ローマ神話の最高神、ジュピターを表す。大いなる幸福の星と考えられている。ホルストの曲も、力強さと喜びにあふれる英雄、宇宙に夢を託す人類の希望をイメージさせる。天体としての木星は、太陽になり損ねた星で、大きさが足りないために、自ら燃える恒星になれなかった。それだけ底知れぬパワーを内に秘めている。

「土星、老いをもたらす者」Saturn, the Bringer of Old Ageは、重苦しい雰囲気で始まる。ローマ神話では農耕神サトゥルヌスSaturnus、ギリシャ神話では時の神、クロノスKronosを表す。大鎌を持った死の神のイメージである。終末に訪れる安らぎは、永遠の眠りを受け容れることでもたらされる。子どもたちは土星のリングを、縁のある帽子、甘いドーナツのように思っている。木星に次ぐ大きさだが、比重が0.69ということは、巨大な水槽があれば、土星は水に浮いてしまうのである。

「天王星、魔術師」Uranus, the Magicianは、呪文のような響きで、聴く者の意識を攪乱かくらんさせる。いかがわしい液体を飲まされ、ここがどこだかわからなくなってしまったような。幻覚にとらわれていても、夢は現実と同じくらい生き生きとしている。ギリシャ神話で天空を神格化した神、ウラノスの名で呼ばれている。怪物の子どもが生まれたことを忌いみ、妻の胎内に戻したことで、妻と共謀した息子クロノス（＝土星）に去勢される。天体としての天王星は、太古の昔に巨大な星と衝突し、横倒しにされたまま自転しているため、公転周期八四年のうち、二一年は昼と夜が来るが、次の二一年は昼だけ、その次は昼と夜が来て、最後の二一年は夜が続く。

「海王星、神秘主義者」Neptune, the Mysticは不安定な音の反復

で、とらえがたい星の幻影を示している。女性のコーラスとともに、謎はさらに深まっていき、意識の彼方に消えて行く。ローマ神話ではネプチューン、ギリシャ神話ではポセイドンPoseidōnに相当する。海の神を想起させるように、海王星は鮮やかなブルーの天体で、夏空に浮かぶ白い雲のような模様まで見える。美しい姿とは裏腹に、太陽系最速の時速二千キロの暴風が吹き荒れている。接近する物体を、ことごとく打ち砕いてしまうだろう。

もしホルストの《惑星》を買うのであれば、カラヤン　Karajanが指揮したウィーン・フィルハーモニー管弦楽団Wiener Philharmoniker　の演奏をお勧めする。最近発売されたMQA-CDの352.8kHz/24bitの超高音質で聴けば、コンサート会場で生演奏を聴いているような感動が味わえる。

ちなみに、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル・オーケストラRoyal Scottish National Orchestraの《惑星》The Planetsには、海王星の後に、「冥王星、復活させる者」Pluto　The　Renewerと、「神秘のトランペッター」The Mystic Trumpeterがついている。ホルストの意図とは異なるわけだし、矮惑星に格下げされた冥王星以下の曲は、《惑星》の演奏からは外されるべきだろう。

さて、次に実際の惑星が、古代人にどのようにとらえられていたかという問題に移ることにする。ギリシャ人は太陽系に属する七つの星が、地球の周りを回転しながら、一定の音を出していると考えていた。ピタゴラスの宇宙観では、

ド　　水星
レ　　金星
ミ　　太陽
ファ　火星
ソ　　木星
ラ　　土星
シ　　月

のような対応関係が考えられていた。
　惑星探査機ボイジャーが太陽系の惑星や衛星の音を録音し、地球に送り届けたのは、一九七〇年代の後半から、一九八〇年代末のことである。星々が出している音は、そのままでは人間には聞こえない。音程を可聴領域に変換することで、波形の変化を耳にできるように加工したのである。
　当時の僕は「地球の声」Voice of Earthと「衛星イオ」Sphere of Ioのテープ、「海王星」NeptuneのＣＤを買った。一つ二千円程度したようだ。デジタル化するにも手間がかかる。現在ではiTunes StoreでNasa Voyager Space Soundsというアルバム全十曲が、千五百円とかなり割安でダウンロードできる。

　ここでは、右のアルバム全体を耳にして、自分なりに感じた印象を述べてみることにする。「木星」は太陽になり損ねた星である。威厳があって、揺るぐところがない。崇高な波動が宇宙空間に響きわたっている。
「衛星ミランダ」Mirandaは、鉱物的でゴツゴツした衝撃波を放ちつつ、天王星の不可思議な波動に包まれている。聴いていて、意外とリラックスできる音である。
「海王星」Neptuneはロマンチックなブルーとは裏腹に、猛たけり狂う暴風の底知れぬうなりで、遠方から眺めていても背筋に恐怖が走る。ジェット機の真下で聞く轟音ごうおんに、絶え間なく脅おびやかされるといった感じである。
「天王星の輪」Rings of Uranusはきしるような金属音と、周囲を吹きまくるジェット音が、奇怪な波動を発しており、幻聴のような宇宙の叫びに聞こえてくる。
「土星の輪」Saturn's Ringsは天王星の輪と比べて、重低音のエネルギーに満ちている。強弱を繰り返すうなりは、暴力的な波動が、今にも迫りかねないことを告げている。石の礫つぶてが弾き飛ばされ、逃げ場なく襲いかかってきそうである。
「土星」Saturnは暴風が吹き荒ぶ球面と、超音波を含む輪の回転す

る響きが、相入れない潮目、音の境界を作り出している。一瞬も心休まる時のない、宇宙船も接近不能な空間を形作っている。
「地球の歌」Song of Earthは静謐せいひつな音楽といった印象である。夜の地球は人間が活動を休止し、夢見心地の中で休らっている。全曲の中で最も癒しの効果が高いと見られる。地球も人間も、休息の時を必要としている。
「木星の衛星イオ」Sphere of Ioは、高速で移動する飛行物体のような音を出す。低周波の音は、次第に高まりを増し、地響きとともに、火山からマグマを噴き上げる。キンキン響く高音も伴っており、聴いていて飽きることがない。太陽系の衛星で、イオほどダイナミックな活動をしている星は、地球をおいてはない。
「天王星」Uranusは凍りつく空間を、ドップラー効果を伴って走り、絶え間なく強風が吹き荒れている。そのうなりが、時として絶望的な叫びに聞こえてくる。
「地球の声」Voice of Earthを聞くと、この星は何ておしゃべりなんだと思ってしまう。様々な音の中には、人間活動によるものも混じっている。しかし、宇宙空間からだと、人間もまた地球の営いとなみの一部である。地球を取り巻く磁気に、太陽からの宇宙線が衝突する。低音を主調とした響きに、地球のメッセージが混じっている。何を語っているのだろうか。